

意識は低下傾向でも行動は習慣化 環境に役立っている実感を「すすんでエコ」の原動力に

生活者研究センター
ライフスタイル研究室

2014年10月の現場レポートでは、環境・エコに対する関心は高い水準を保ちながらも低下傾向にあることを報告しました。その後も関心は低下傾向が続いていますが、一方で習慣化された行動もあります。今回のレポートでは、2008年の調査開始以降の約10年を振り返り、環境・エコへの意識や行動の変遷と現在の実態を報告すると共に、これからも行動を続けていくために大切な課題とポイントを考察します。

- 環境・エコへの関心は低下傾向が続く
- 意識と行動の変遷「節約エコ」から「習慣エコ」へ
- 日々の行動の効果を実感できないのが課題
- ごみの量、リサイクル、エネルギー消費量などに確かな効果
- 役立っているという実感が、「すすんでエコ」への大事なきっかけに

【調査概要】

「生活者の暮らしに関わる意識と行動」

調査期間：2008年、2010年、2011年、2012年、
2014年、2016年（いずれも9月）
調査方法：インターネット調査、郵送調査
調査対象：首都圏在住20～70代男女
回答者数：2008年* 男性540人、女性1,195人
2010年 男性1,742人、女性1,992人
2011年* 男性755人、女性760人
2012年 男性1,725人、女性1,784人
2014年 男性1,672人、女性1,771人
2016年 男性1,683人、女性1,774人

*2008年、2011年の調査対象は首都圏在住20～60代男女

「生活者の環境意識と行動実態」

調査期間：2013年6月
調査方法：家庭訪問インタビュー
調査対象：首都圏在住20～40代女性
対象者数：12人
調査期間：2017年7月～9月
調査方法：家庭訪問インタビュー
調査対象：首都圏在住20～30代女性
対象者数：6人

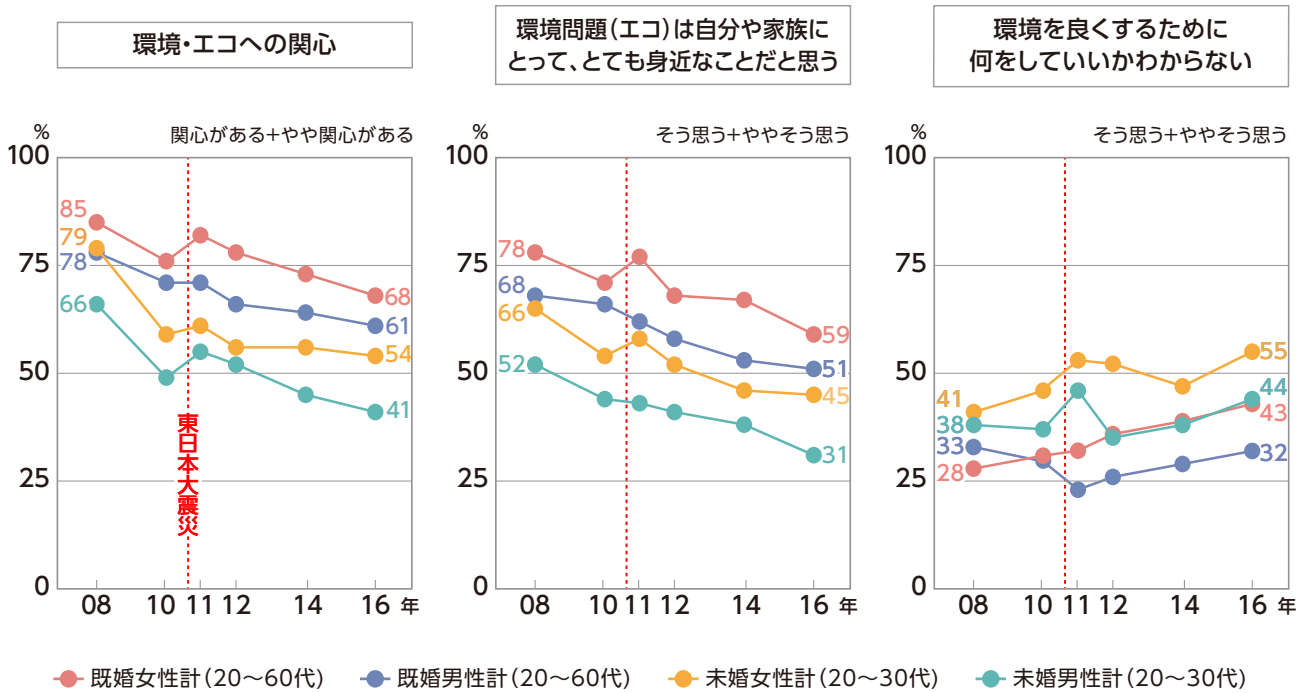
「暮らしに関するアンケート」

調査期間：2017年11月
調査方法：郵送調査
調査対象：首都圏在住20～70代女性
回答者数：535人

環境・エコへの関心は低下傾向が続く

花王生活者研究センターが実施した約10年にわたる調査では、「環境・エコへの関心」は、北海道洞爺湖サミット*がおこなわれた2008年の値をピークに、その後男女共に低下。2011年の東日本大震災直後に一度高まりますが、再び低下傾向が続いています。「環境問題(エコ)は自分や家族にとって、とても身近なことだと思う」も同様に低下し続けています。それに対し、「環境を良くするために何をしたいかわからない」という人が徐々に増えているのが現状です(図1)。

*北海道洞爺湖サミット:2008年7月に北海道虻田郡洞爺湖町でおこなわれた第34回主要国首脳会議。環境・気候変動などを中心に議論された。



(花王 生活者研究センター調べ)

(図1)環境意識の変化

「ふだん実施していること」をトレンドでみると、節電、ごみの分別、詰め替え商品の利用などは直近でも7割以上の実施率を維持し定着していました(表1)。訪問調査から、節電では「こまめに消す習慣がついた」、ごみの分別では「自治体のルールだから」、また節水では「エコもあるが節約の意識から習慣に」などの声が多く聞かれ、環境・エコ行動が自然と社会マナー化、習慣化していることがわかりました。

(表1)ふだん実施していること

(%)	使っていない部屋の電気はこまめに消す	冷暖房の設定温度は控えめにする	LED電球を使っている	入浴時はシャワーをこまめに止める	ごみをきちんと分別する	洗剤やシャンプーなどは詰め替え用を購入	エコバッグを持ち歩く
08年	84	78	—	—	88	84	65
10年	78	73	—	—	78	80	70
11年	89	82	—	—	83	85	71
12年	84	77	37	—	80	79	72
14年	81	66	51	64	74	78	73
16年	79	64	57	61	72	75	69

20~60代既婚女性
(花王 生活者研究センター調べ)

日々の行動の効果を実感できていないのが課題

「ごみの分別やリサイクル」は、最近では、各自治体ごとに徹底されたルールなどにより、意識が高く保たれていたり、「温暖化」や「異常気象」などの地球環境の変化による影響を身近な問題として感じる人が増えています。

その一方で、「自分ひとりの日々の行動が、果たして環境改善に結びついているのか」という疑問を感じながら行動している人が多いことがわかりました。「行動の効果を知りたい」、「何をすれば効果が出るかわからない」といった声が多く聞かれ、効果を実感できないことが環境・エコへの関心を低下させるひとつの要因になっていると考えられます。

自分ひとりの行動がどう改善に結びつくのかわからない。冷房を1℃上げたら、1分水の流しっぱなしをやめたらなど、何をしたら役に立つのかわかたら心掛ける。
(20代女性、既婚)

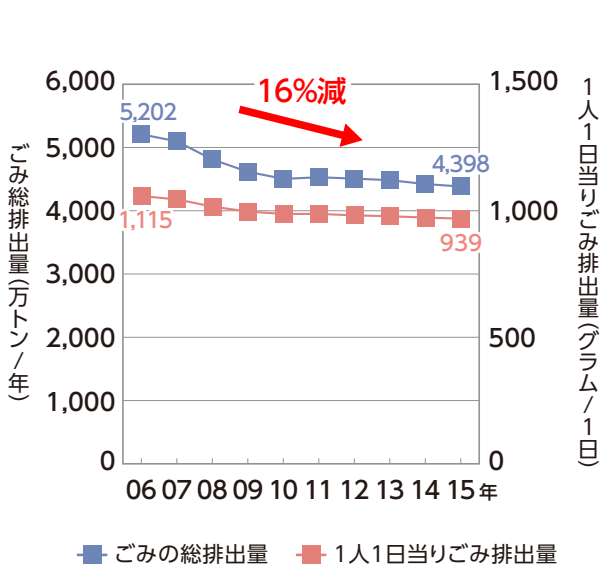
ごみの細かい分別を守っているつもりだが、分別されたものがどのようにリサイクル、焼却、廃棄されているのが気になる。
(30代女性、既婚)

一人ひとりの取り組みがどの程度役に立っているのか、具体的な数値が見えないと、努力しようという気持ちもわなくなってしまう。
(40代女性、既婚)

自分の行動がどの程度エコに役立っているのか、リサイクルや環境改善へつながっているのかの情報量が少ない。
(70代女性、既婚)

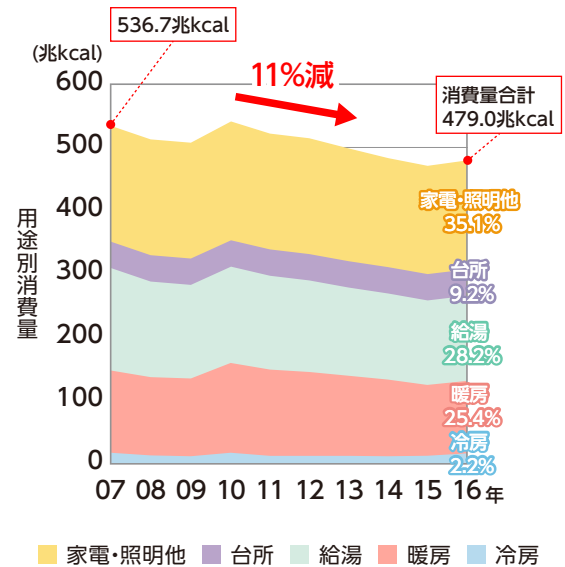
ごみの量、リサイクル、エネルギー消費量などに確かな効果

実際に公的データで確認すると、ひとりが1日に出すごみの量は、ごみの分別や詰め替え商品を利用する効果もあり、この10年で約16%減少しています(図3)。リサイクルでは、ペットボトルのキャップを外す・ラベルをはがすなど、廃棄する際のひと手間が質の高い再生品にもつながっているようです。また、家庭でのエネルギー消費量は、こまめな節電や調理での熱効率を考えた電気・ガスの使い方、さらには、家電の省エネ技術の向上や普及などといった企業努力もあり、10年間で約11%と着実に減少していました(図4)。



日本の廃棄物処理(平成27年度版)
平成29年3月 環境省大臣官房廃棄物・リサイクル対策部 廃棄物対策課

(図3)ごみ総排出量と1人1日当りごみ排出量の推移



一般財団法人日本原子力文化財団「エネ百科」
一般財団日本エネルギー経済研究所
「エネルギー経済統計要覧2018」より作成

(図4)家庭での用途別エネルギー消費量

役立っているという実感が、 「すすんでエコ」への大事なきっかけに

ごみの分別やリサイクルなど、ひと手間増えても続けられてきた行動は、着実に効果へとつながっていました。「行動の効果が知りたい」と願う生活者の声からは、それを実感できれば、モチベーションも上がり、まだまだ行動を広げていけそうな可能性を感じました。公的データなどから「役立っている実感」を得ることは、これからの大きな励みや自信になり、さらに自ら一歩「すすんで」環境・エコ行動(すすんでエコ)に取り組むための大事な原動力となることと考えます(図5)。



(図5) 社会の動きと生活者の変化

【花王の環境への取り組み】

“いっしょにeco”を知る、体験する—地球環境と花王のエコ技術の情報発信ミュージアム

花王の製品は、ほとんどが毎日のくらしの中で使うもの。そのため、花王は、環境に配慮したモノづくりを目指して、原材料選びから、家庭でごみに出すまでのすべてをエコロジー視点で考える、“いっしょにeco”に取り組んでいます。

その一環として、先端のエコ技術を体験していただくために、花王和歌山工場内に開設したのが、「花王エコラボミュージアム」です。アタマ・カラダ・ココロを刺激する展示や映像、体験プログラムによって、地球環境のいまや、花王のエコ技術に触れて、毎日のくらしの中のエコについて考えるきっかけを提供していきます。

花王エコラボミュージアム

▶ <http://www.kao.com/jp/corporate/about/tour/museum-tour/eco-museum/>

●お問い合わせ・ご意見は **花王株式会社 生活者研究センター**

〒131-8501 東京都墨田区文花 2-1-3 TEL. 03-5630-9963(月～金 9:00～17:00) FAX. 03-5630-9584

くらしの研究 <http://www.kao.co.jp/lifei/>

※掲載の記事・写真の無断掲載・複写を禁じます。